

「2015年インドネシア大学スプリングスクールプログラム参加報告書」

京都大学経営管理教育学部・修士課程1年 勝村良裕

① 学習成果（今回の派遣に参加する前とした後とで、留学、大学での学習、国際理解への意欲に関して、自分にどのような変化が起きたか、今回の派遣に参加して、次の海外留学についてどのような関心・計画を持つようになったかなど）

学習の中心は、インドネシア語の習得であった。2週間の短い期間であったが、学んでみて分かったことは、インドネシア語の言語としてのシンプルさである。英語等他の言語を既に学んでいたこともあるが、シンプルといえるからこそ、日本でも引き続きインドネシア語を勉強したいと、考えるようになった。

学習全般についていえば、インドネシアの学生と広く交流した際、彼らの日本への関心の高さを強く感じた。そのような意識に接することで、逆に自分も、相手のことをもっと知りたい、すなわち国際理解を深めていきたいという気持ちが一層強まった。今後も機会を見つけ、可能な限り、海外留学に参加していきたい。

② 海外での経験

海外の大学で学ぶ経験は、今回で二回目であるが、今回のプログラムの大きな特徴は、現地学生との交流が大きなウェイトを占めていた点であった。

今回、インドネシア大学側では、バディ制度（日本人の学生一人に対して、それぞれ現地の学生が一名割り当てられ、現地での生活一般をフォローするという制度）を用意していた。最初にこの仕組みを聞いたときは、そこまでサポートされると、日本人側はかえって気づまりになるのではないかと、やや危惧を抱いていた。しかし、実際に経験してみると、この仕組みにインドネシア大学の学生が熱意を持って取り組んでくれたことで、交流の絆がより太いものとなった。2週間の間であったが、授業以外の時間の多くを私たちのために割いてくれたことに対して、非常に感謝している。

③ プログラム内容

プログラムの中心は、既述の通りインドネシア語の学習であった。語学の授業は2週間の滞在期間のうち、7日間（計14時限）行われ、1日のうち午前中を中心に約3時間半が授業に充てられた。授業内容はインドネシア語を一から学ぶものであり、アルファベットを始めとして、初歩の言葉を学習した。学習方式は、ゲーム形式等、参加型のものも多く、自身の学習意欲を引き出してくれるものであった。

語学以外のプログラムとしては、現地学生に混ざっての講義聴講、および現地学生との共同作業によるプレゼンテーションがあった。前者は、日本語も交え、また、日本人の発言を積極的に促している点において、さらに、後者は現地学生とのコミュニケーションが必然的に密になる点において、意義のあるプログラムであった。

④ 進路への影響

私自身、卒業後の方向をまだ明確に定めてはいない。よって、今現在、今回の経験が直接的に進路に大きな影響を与えるとは考えていない。

ただ、今後の方向性の一つとしては、独立して、ビジネス・コンサルティング関連の仕事を行うというイメージを持っている。その場合、グローバル化の更なる進展が不可避である中、アジア経済の大きな成長エンジンの一つともいえるインドネシアの社会・経済環境を肌感覚で認識できたことは、いい経験であった。このような経験は、コンサルティングを行う際には、自身の大きな武器の一つとなると考えている。

以上